

# 「造反有理」の印象

長 <sup>なが</sup>

瀬 <sup>せ</sup>

隆 <sup>たかし</sup>

(日商社員)

〈広州郊外、民兵の演習〉

## ひとりの商社員として

文化大革命で、愛群というかつての所有者の妻の名前をあらため、人民という名になった広州の代表的なホテルは、一三階に大食堂があり、中央の壁はさまざまな民族衣装をまとった国内の少数民族にとりかこまれた、ひととき背の高い毛沢東の壁画があった。広州

駅から、ホテルに着き、まっすぐに大食堂に入った私たちは、すでに広州に集結していた北京・上海の日本語学生紅衛兵にとりかこまれた。

ひとりがマイクに進み、「皆さん、『大海航行靠舵手』を歌いましょう」と呼びかけた。つづいて、毛語録の学習の提案がなされた。「日本語版では一八八ページの第二段です」と私たちのテーブルをうけもっている紅衛兵がいう。

「毛主席は私たちに教えています」とマイクの紅衛兵がいう。全員が声をあけて本文を読む。

「政治工作はすべての経済工作の生命線である。社会の経済制度に根本的な変革が生じた

時期には、とりわけそうである」(訓読文書(一九五五年))

これは日本商社員たちに接するにあたって彼ら紅衛兵たちが毛思想のどこに依拠しているかを、学習を通して、私たちに告げたものでもあった。

紅衛兵代表が歓迎の挨拶に登壇した。彼は私たちに敬礼し、中国語で草稿を読んだ。

「日本の友好商社の皆さん。皆さんたちはプロレタリア文化大革命が、その勝利の最終段階に達しつつあるまさにこのときに、第二回中国輸出入交易会に参加されるために中国にまいられました。私たち主席の紅衛兵は皆さんたちを心から歓迎いたします。そうして、彼はアメリカ帝国主義・ソ連修正主義・

日本反動派・日共修正主義の四つの敵がこの交易会の不成功を期待しているのであるといひ、かならず成功させて彼らにプロレタリア文化大革命の勝利を見せつけてやろう、と結んだ。

つづいて、全員に語録、老三篇、参加章である毛沢東のバッジが贈呈され、私たちはそれぞれの部屋の鍵を受けとり、その後一カ月暮すことになった自室に入ったのである。

部屋にも毛肖像があり、ふたつの語録板があった。窓をあけると中国第三の河・珠江の豊かな流れがあり、行き来する大小の船体には「中国共産党万才」「毛主席万才」の言葉が読めた。対岸には「無産階級文化大革命、勝利万才!」の赤い文字がホテルに向けて並べられてある。

日が暮れて、これらの文字が見えなくなると、対岸のアパートの屋上のおなじ文字に電光が入る。私は会社に広州着の電報を打つたために一階のロビーに降りる。するとそこに「全国を毛沢東思想の大学校にしよう」という林彪の書があり、英訳も送られてある。

商談の開始。最初の数日は挨拶だけである。「先生は、中国は何度目ですか?」

「二度目です」

「最初はいつです」

「一〇年前の一九五七年、原水爆禁止運動の使節団に随行してソ連の各地をまわり、帰途中国に立ちよつたのです。当時はロシア語とロシア文学を専攻する学生で、商社員ではありませんでした」

「先生の会社はソ連貿易が主体ですね」

「そうです。私自身、六〇年末に社員になつてからはソ連貿易の仕事をしてきました」

「最近、ソ連に行かれたことがありますか」

「あります」

「ソ連の印象はどうですか?……」

ややあつて、話題は善隣学生会館事件と日共修正主義指導部に移る。

「日共修正主義者の愛国華僑学生にたいする暴行をどのようにお考えですか?」

「たいへん残念で悲しいことだと思います。十なければ良かった事件だと思います」

「先生は日共修正主義者とのように闘争されましたか?」

「事件の直後、日本国際貿易促進会と日中友好協会正統本部に求められてカンパをし、一日防衛に立ちました。また『善隣学生会館の

華僑学生を守り、日共修正主義を粉砕する全国大会』に参加し、デモ行進をしました」

まことにそのとおりである。それは日ソ、日中の双方の貿易をやっている中小企業の社員として、会社命令によってなされたのである。どうやら、東京で予想されていたように、善隣学生会館事件への取りくみが政治優先のこの商取り引きの判定の基準となつていくことがわかった。

商談にさきだつて語録歌曲、毛沢東歌集の練習を日課とする商談室があった。それはまた、私が主体と考えている商品の商談室でもあった。ああ、あの部屋の前で、毎朝、どれだけ数の歌を教えられたことだろう。私は、プロレタリア文化大革命がはじまつて以後の中国の作曲家たちの主要なエネルギーが語録に曲を付すことであつたことを知つたのである。そして、ある日、語録の学習や歌の練習をやっているのが私たち日本人と華僑だけであり、西欧諸国の商社員がそれを免かれていることを知つておどろいた。

あるとき、ある商談室で、日本人たちが語録の学習をし、プロレタリア文化大革命について講義をうけているにもかかわらず、遅れ

「造反有理」の印象

てやってきたフランスの商社員が先に入つて  
商談をはじめたのを見て、ひとりの日本商社  
員は激怒した。彼は決して好んで学習してい  
たのではなく、それを自分の仕事として甘受  
していたのである。

「この差別はいったい何事ですか！」と彼は  
抗議した。

「この人は明朝、帰国するので、特別にはか  
らったのです。理解してください」と抗議さ  
れた側はうらたえていう。

しかし、彼は、それが嘘であることを見ぬ  
き、「よろしい、ではこのフランス人は明日  
は決してここには来ませんね」

「……………」

「もし来たら、どうしますか？」

白けきった空気が流れ、フランス人はおど  
ろいてみていた……………」

彼は友人にも注意され、また、注意される  
前に自分でも気がつく。ドゴールのフランス  
と佐藤の日本は違ひのである、と。フランス  
人が完全にビジネス・オンリーでできること  
が、政府に認められていない民間貿易である  
日本人の場合にはできないのである、と。そ  
して彼は中国と国交を結ぶ政府を日本人が持

つまでは、算盤とともに毛語録を持ち歩か  
なければならないことを悟るのである。帰つて  
は、また腹がたつてくるのである。

### 「日共批判」の構成劇

交易会がはしまつて一週間もたったころ、  
ホテルのあちこちに、いつせいに日中友好協  
会正統本部の善隣学生会館事件の写真が張り  
だされた。このなかで、とくに目を引くのは、  
素手で坐っている華僑学生に、ヘルメット姿  
で棍棒をもつた日共系青年が殴打にかかる一  
瞬と、顔から血を出して倒れている息子を看  
護している華僑婦人の姿である。

すぐに張り紙が出された。  
「日共宮本修正主義指導部による血の負債は  
血で返さなければならぬ——紅衛兵」  
「毛沢東思想で武装された中国人民を侮るこ  
とはできない——紅衛兵」

彼らの日共宮本指導部にたいする憤慨は、  
私の予想をはるかに上まわっていた。

人民ホテルには昼食のとき、私たちにニ  
ースや時事解説を伝える毛沢東思想宣伝隊が  
あり、上海外国語学院の女性の助手と女子学  
生がこれに当たっていた。

「日本の友好商社の皆さん、こちらは人民ホ  
テル、毛沢東思想宣伝隊でございます。今日  
は喜ばしいニュースをお伝えします。昨日、  
北京に革命委員会が成立しました。……」あ  
るいはまた、「広西省に侵入したアメリカ帝  
国主義者の飛行機がわが人民解放軍によつて  
撃墜されました」とマイクで放送していたの  
である。

食堂のエレベーターの前にごろした張り紙  
が出された夕方、私は偶然エレベーターに乗  
りあわせ、彼女たちについていたことがある。

「あなたたちは、日共指導部の人たちが中日  
戦争に命をかけて反対し、日本軍国主義が破  
れたときまで十何年も牢屋で闘った人たちで  
あることを知っているのですか？」

「知っています。しかし、いまはもう墮落し  
てしまったのです。言葉ははねかえるよう  
に私にかえされ、私はつぎの言葉を失った。  
五九年の離党者である私にとつて、こういう  
言葉ははじめてではない。しかし、それは日  
本人同士のおなじような体験の所有者のあい  
だの会話であつた。

「ほんとうはもっと前から墮落し、修正主義  
者になりさがついていたのですが、それをかく

してはいたのですよ。中国の資本主義の道を歩  
むひとにぎりの実権派もそうでした。プロレ  
タリア文化大革命がその仮面をあはいたわけ  
ですよ……………」

「……………」

珠江のほとり、かつては西欧諸国の居住区  
であつた二帯、アヘン戦争当時に使われた砲  
台のある散歩道を歩きながら、かつて学連中  
執であり、五八年の被除名者である旧知とこ  
の話を話したことがある。そのとき、  
私たちのあいだで話題になつたのは韓美智子  
と共産主義者同盟の問題であつた。

「韓美智子さんは世界に知られた日本民族の  
英雄となつた」という毛沢東の評価と、この  
葬儀への日共の不参加に関連して「トロツキ  
ストによる妨害」と報じた北京放送とのあい  
だにあつた分裂が話題になつた。プロレタリ  
ア文化大革命は安保闘争の評価に新しい視点  
を提供している。

だが、こうした紅衛兵たちが日本友好商社  
の教習人のなかに見出した友というのは、善  
隣学生会館そのほかで、日共修正主義と闘つ  
てきた商社の青年グループであつたのであ  
り、最低限の動員に応じた以外には何もしな  
かつたし、する気もなかつた私などではなか  
つたのは当然である。

メーデーの日、当日広州に滞在していた五  
〇〇人ちかい日本人は、中山路をとおり、市の  
中心までデモ行進し、解散後、日中双方の青  
年たちは郊外の白雲山ふもとの自然公園に集  
結し、日中青年交流をおこなつた。歌と踊り  
のこの会の終りころ「善隣学生会館における  
日中西国青年の戦闘的な友情！」と題される  
構成劇が上演された。

はじめに華僑学生に扮する日本語学生「紅  
衛兵が出てき、毛語録のうち構成劇の副題で

もある「敢然とたたかい敢然と勝利する」の  
第一節を朗読する。

「全世界人民は団結して、アメリカ侵略者と  
そのすべての手先をうちやぶらう。全世界人  
民は勇気もち、敢然とたたかい、困難をお  
それず、あとからあとから身を挺して進んで  
ゆくべきであり、そうすれば、全世界はかな  
らず人民のものである。すべての悪魔はここ  
らず一掃されるであらう。」(「大陸、アメリカの  
特許する罪を」) この節は交易会の全期間をつ  
らうして、もつとも朗読頻度の高いものであり、  
私の何人かの知人たちは、一一四ページ、と  
いわれると暗誦できるまでになつてた。

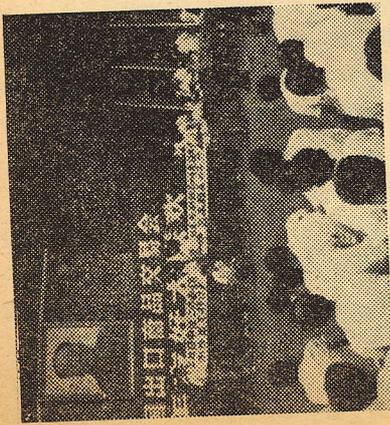
ついで準国歌ともいふべき「東方紅」が  
歌われる。

東方に太陽は昇り、中国に毛沢東があら  
われる

彼は人民の幸福のためにつくす、彼こそ  
人民の偉大な救世者

「毛主席は私たちの心のなかの、もつとも  
つとも紅い太陽、中国人民と全世界人民の指  
導者だ。毛主席に反対する者は、私たちの敵  
だ！」と華僑学生たちは声をそろえて叫ぶ。  
このなかには人民ホテル毛沢東思想宣伝隊の

「造反有理」の印象



〈日中合作の日共批判の構成劇〉

甲高い女声もある。そのひとりが進み出て、

「日中友好の名をかかげて、毛沢東思想に反対するニセ日中（友好協会）は、（善隣学生会館から出てゆけ！ 日共修正主義者は出てゆけ！」

すると「日共修正主義暴力団・宮本組長の子分」たちが出てくる。この役を振り当てられた各社の青年社員たちは実際の「闘争」はやらずに、構成劇に参加したので、この悪役を演ずるハメになったのであろう。彼らはつとめて戯画的な日共、日本の与太着的な日共を演技する。

「バカヤロー。ここを、どこだと思っているか。ここは日本だぞ……」

「ワガ党には二〇万人の党員がいるのがワカランか？」

「ワガ党は議会をつうしてカクメイをやる。お前たちの知ったことじゃない」

こうして、日共派は「ニセ日中は会館から出てゆけ」という大字報（壁新聞）をはがしにかかり、とめようとする華僑学生とのあいだで押しあいがはじまり、結局、前者が後者に舞台から押しだされてしまう。

残った華僑学生と紅衛兵たちは革命造反派の名のおこりとなった「造反有理」（「反逆には道理がある」という毛歌曲をうたう。

マルクス主義の道理は多くあるが、結局は「反逆には道理あり」の一句につきる。

この言葉は、「もしも日中がニセ日中であるならば、これに反逆し、叩きだすのみである」という実際の華僑学生の事件における思想をも説明する。

こうしているうちに、いちど舞台を去ったニセ日中がヘルメット帽子をかぶり、棍棒にぎった民主青年同盟員とともに登場し、彼らを督戦しつつ、日本事務局の面々の扮する日共修正主義指導部があらわれる。

毛沢東派は日中画国語で語録のしかるべきページをひらく。

「およそ敵が反対するものは、われわれの支持すべきものである。およそ敵が支持するものは、われわれの反対すべきものである」

激怒した日共指導部は「カカレ！ ヤレ！」と命令をくだす。

「正当防衛だ。正当防衛はやりすぎても罪に

ならない。あとはわが党が責任をとる。徹底的に叩きのめせ！」

民青は棍棒をぶりまわし、華僑学生たちはばたばたと倒れる。このときになって、日中正統本部、日本国貿促進傘下の日本青年たちが救援にあらわれ、ケガをした中国の友人たちを背負って舞台から去ってゆく。

実際の事件はこれでおわり、その後は相互の動員合戦がおこなわれ、事件は東京地裁に持ちこまれたのであるが、舞台にはつづきがある。

「決意をかため、犠牲をおそれず、あらゆる困難を克服して、勝利を闘いとるようにしなければならぬ」（『愚公移山』）が読まれ、太陽のごとき毛沢東肖像が持ちだされる。マーチ風の「大海を行く船は舵手に頼る」を歌いながら、負傷した華僑学生を先頭に、人数を集めた日中画国青年が隊列をととのえて、日共派にたちむかい、恐れおののいた日共のある者は降参し、ある者は舞台から逃げだす。そして、ファイナル。出演者の全員が、ウイグル族の明るい歌曲「毛沢東万歳！」を歌っておわる。

日本人の一部のあいだでは、あるいはかな

り多数のあいだでは、ひそかに、「日中合作の猿芝居」とまで極論されていたこの構成劇は、しかし、中国交易団の高い評価を受け、中山記念堂で再演までされたのであった。

私はまた、民青を演じたひとりに、「いくら商売のためのゴマスリとはいえ、自分が嫌になりました。もう私は二度と広州交易会には来たくありません」という告白をも聞いている。

しかし、五月一四日の夜、人民ホテルでおこなわれた中国交易団団長李俊氏の交易会総括の講演においても、この構成劇の立案者である一部の日本青年たちの活動は非常に高く評価されたものであった。毛沢東思想の絶対化のゆきつくところ、こうした人の大量発生となつては何のプロレタリア文化大革命であろうか？

北京に滞在し日中友好運動を率領していると目させる西園寺公二氏は広州の日本人全員を前にした会合でこう語った。

「私は、皆さんたちのすべてがマルクス・レーニン主義者だと思いません。それは私を修正主義者にすることが不可能であるとおなじように、不可能なことです。私には北京

に多くのアジア、アフリカから来ている友人たちがいますが、これらの人たちはマルクス・レーニン主義者ではなかったのですが、毛主席の著作を学習することによって、それになりつつあります。皆さんも、毛主席のものをくりかえして読めば、マルクス・レーニン主義者になれるはずですよ」

この数日前、私たちはホテルで「毛主席と百万人の紅衛兵」という記録映画をみた。このなかには、うやうやしく会釈し、語録をさし出して、毛沢東にサインを求めた西園寺氏が出てくる。このとき、場内には、すくなくない失笑が流れたものである。その姿は、見ようと思わなくとも、お茶坊主に見えたのであった。

### 毛沢東の生地・紹山行

メーデーの翌朝はやく、私は前日の構成劇の不快な印象を抱いたまま、紹山・長沙の一泊旅行にとび立った。紹山は毛沢東の生地であり、長沙は学生生活と初期活動の土地である。樹木のすくない華北、亜熱帯の植物の繁茂する華南とも異なり、日本内地と同じ緯度にぞくする湖南省紹山は、この地方独得の目

を射るような赤土をのぞけば、山あいの土地の感じといい、柳そのほかの樹木の類似といい、日本の農村を思わせるものがあつた。

毛沢東の家系は、独立した中農といわれるが、予想していたよりも立派であつた。しかし、置かれてある農具や飼料の物置などから、彼が勤労者の出身であることはわかる。

毛沢東の出生に使われた寝台の前で、案内人の大学の歴史科卒の若い女性は「ある外国のお客さまは、ここから太陽が昇つたのですねとおっしゃいました」と言葉をおくわえる。

紹山にはまた開館もない毛沢東博物館があり、彼の七〇年の生涯を豊富な資料によって私たちにしめす。

最初の資料室には、清代の弁髪と服装の両親、母を囲んでの毛を長兄とする三人兄弟、および若い毛自身の写真があり、その下には六人の死者たちの写真が飾られてある。従妹の毛沢建（二九年）、最初の妻の楊開慧（三〇年）、末弟の毛沢覃（三五年）、次弟の毛沢民（四二年）、毛沢建の息子の毛楚雄（四六年）、楊開慧との間の子、長男の毛岸英（四三年）——朝鮮戦争の六人である。彼らは、それぞれ年と場を異にしつつ、中国革命と朝鮮戦争

で死んでいるのである。

「毛岸英の朝鮮の友人のみなさんが、ここにまいりまして、毛主席の崇高なプロレタリア国際主義の精神を、たたえられます」と同じ案内人がいう。

博物館の最後の資料室は、プロレタリア文化大革命の時期に当てられてあった。そして、そこにかかげられてあった昨年八月の第一回中央委員会(2)の写真では、劉少奇、鄧小平以下、文革以後批判されたすべての人たちが墨でぬりつぶされてあった。ひるがえって思いたすと、それまで見てきた十いくつの資料室のどこにもこれらの人たちは顔を出しておらず、林彪との長征時の写真だけが飾られていたことを思い出した。そして、資料室の最後は、百万人の紅衛兵と会見する天安門上の林彪と七四歳の毛沢東だったのである。

「毛自身は七三歳(中国での厄年)以上生きたいとは考えていない。そうなら、彼にとつてはほとんど神に近い存在であるカール・マルクスのところに行きたいというのである。わたしはこれに強く抗議して、中国人民はかれを必要としている。マルクスも彼の長生を望んでいるはずだ、といった。彼は、

『そんなことはない』といい、もう五年この世にいれば十分だというのである」と六〇年に訪中したイギリスのモンゴメリーは伝えている。\*

毛語録を胸のポケットに入れ、実演演習をする一〇歳の子供たちを見ていると、「永遠に変色しない中国」をつくるための革命の犬覚悟のほどを知るとともに、毛沢東その人について考えないでおれない。

\* 中国ではいたるところで侵略戦争時代の日本人の負債について考えさせられる。広州郊外の人民公社で、私たちは、孫と留守番をしているおばあさんの家に入り、茶の接待をうけ、一家の収入やその使われかたなどについてたずねた。そのとき、あるひとりが、「この村には日本軍が来ましたか？」と発言したのである。「もちろん来ました。しかし、あのころのことは忘れました。あなたたちは、日本の友好商社の人たちだからです」とのことであった。長沙では、青年の毛沢東が遊んだといふ、湘江の中洲橋(ちゅうしゅう)頭を左に見て走るバスのなかで、案内人は「古く、美しくかつたこの市」が日本軍に焼かれ、三日三晩にわたって燃えつづけたことを語った。

生まれたときにはもう「滿州事変」がはじまっていた私などはこの戦争の責任があらうはずはない。しかし、私たちの父や兄の世代がこれをおこない、今日、その負債をかえさず、かえそうとも思っていない政府を許しているということで私もまた中国への罪の末端の一部につながらないとはいえない。ここで完全に免罪されるのは非転向であった宮本氏ら日共の指導者たちと一部の宗教運動家だけであろう。

そしていま、東京に帰って、過ぎ去った旅を思い浮かべるとき、あるひとつの風景が私の前にひらけてゆく。それは北京市郊外の蘆溝橋の風景であった。蘆溝橋は真珠湾につらなり、それはまたヒロシマにつながるであろう。そして、このヒロシマに関連する運動が縁となつて、一〇年前、学生日共党員の私は中国の土を踏み、そしていま、日共にはそくしていないことによつて商社員として中国にこられたのである。そして、中国の反日共の傾向はますます大きくなるから、それは当然私たちのうえにもはねかえってくる。私はこの対立が意味するものを見つめてゆきたい。

(写真も筆者撮影)

のシロ



ろは人間じつもの深淵に  
響きまじり、ふい  
ふもろな徳に、一  
た人聞と、これら  
けしはなる性心、い

なれた状態にしている。こ  
ろは、くもりを字んたぐを  
彼は、折つて、もろもろと  
もろつて、たれとある。眼は  
もろの、よとある。眼は

茂夫 哲学